

## 敦煌本『新修本草』校注初稿

岩 本 篤 志

### はじめに

『新修本草』は唐・顕慶四年につくられた中国最初の勅撰本草書である。南朝の陶弘景撰『本草経集注』を継承し、それに注や新附品を加えるというスタイルを採用し、後の『本草品彙精要』、『本草綱目』などの本草書がうみだされる源流のひとつとなった。ただ、結果的に新しい本草書が登場すると古い典籍は不要と見なされ、『新修本草』は散佚してしまった。しかし、江戸時代に仁和寺に古写本残巻があることが発見され、一九〇〇年に発見された敦煌文献の中にもその断片がみつかった。

『新修本草』はその序例からみるに、大きくいって二つの性格を持つ典籍といつてよい。ひとつは薬物のあるべき姿を示し、人民の生命をまもるといふ統治理念を反映した勅撰書として、またもうひとつは自然界に存在するものをいかに利用して薬をつくるか示した医薬の書としてである。

では政権は『新修本草』をどのようにもちい、人々はこれにどのように接したのだろうか。すぐに思いつくのは「治療のため」ということになるが、採集できる資源が異なる時代や地域において、薬を作る、病が癒えるという一連の行為がどのように理解され、受容されたかは熟考する余地がある。また、本草書は「薬」「薬材」といった商品の価値生成と密

接な関係にあり、かつ薬材の産地を記した書物として、商品の流通とも無関係ではない。その歴史的、社会史的な意義は大きい。

また、すくなくとも敦煌と日本で残巻が発見されたことで、古代中世の日本と唐宋期の敦煌において、本草書を紐帯として「人間とモノ（鉱物・植物・動物）」の関係についての認識が一定程度、共有されていたことがうかがわれる。実際、九一八年頃に書かれたとされる深根輔仁『本草和名』は『新修本草』等に言及される薬物の和名を同定し、日本で採取できるものについてはその産地を示した。日本でも『新修本草』の有用性はみとめられ、風土にあわせて受容されていたのである。

このように本草書は東アジア史において重要な意義を持っている。筆者はとくに本草書を通して、南北朝から唐代の「人間とモノの関係」の変遷が導きだせないかと考えた。そこで、まず文献学的な考察に目を通すことからはじめたのだが、本草学には長い研究史と成果があり、それから目を背けては宋代以前の本草書の姿にいたることができないことがわかった。すでに『新修本草』については仁和寺の残巻や敦煌文献などの積文が作成・公表され、中国と日本でそれぞれ復原本が出版されている。しかし、敦煌文献『新修本草』残巻にかぎっては十分に研究されてきたとは言えない。なぜなら敦煌文献が発見された一九〇〇年以降、それらは中国をはじめ英、仏、日へと分蔵される結果となったため、それら全てを実見するのは容易ではない。そして流布する敦煌本の図録もまた不鮮明であり、積文や修復本にも疑わしく思われる点が多々ある。これに困惑していたところ、筆者は幸運にも、英仏蔵の敦煌文献を実見し、何点かのカラー写真を将来する機会を得ることになった。

実際の写本は白黒写真やマイクロフィルムと異なり、墨跡が鮮明である。気づいたのは、広く流通している積文には誤脱、誤読、行数の教え間違いなどがみられるということであった。

そこで本稿ではひとまず、敦煌文献に忠実な釈文と校補を提示し、広く利用に供することとした。もちろん写本そのものにも誤脱、誤写とおもわれる箇所があるが、原則として修正せず提示した。本草書としてあるべき姿を示すのではなく、敦煌文献の一つとして、また史料として示しておきたいと考えたからである。ただ、解釈の便をはかるために、句読点をほどこし、宋版『経史証類備急本草』（北宋嘉定版・二二一年刊、「証類本草」の最善本）によって、校補を示した。

なお管見の限り、現存する敦煌本『新修本草』の残巻はP三七一四（巻一〇・部分）、P三八二二（巻一八・抜粹）、S四五三四+S九四三四v（巻一七〜一九）、序例部分（日本の某財団図書館蔵）とその断片（北京国家図書館蔵、待考）である。なお、Pは Pelliot の名からつけられたフランス所蔵品につけられる略号、Sは Stein の名前にちなむ英国所蔵品につけられる略号である。このうち、序例の広く知られている部分までは、釈文、訳を拙稿で提示済みである（『唐朝の医事政策と『新修本草』』、『史学雑誌』一一四―六、二〇〇五）。また国家図書館断片については、脱稿間近の拙稿中に釈文をあげたので、ここではとりあげない。都合、ここではP三七一四（巻一〇）、S四五三四+S九四三四v（巻一七〜一九）、P三八二二（巻一八・抜粹）をとりあげ、既知の敦煌本『新修本草』を網羅した。

なお、とくに敦煌本の従来の釈文として、代表的なものは以下の三冊である。

馬繼興 『敦煌古医籍考釈』（江西科学技术出版社、一九八八）

叢春雨 『敦煌中医薬全書』（中医古籍出版社、一九九四）

馬繼興等輯校 『敦煌医薬文献輯校』（江蘇古籍出版社、一九九八）

なかでも叢氏の釈文は精度が高いが、白黒のマイクロフィルムによって翻字されたためか、朱字で書かれた部分がよく識別できていないようである。また叢氏が比較対象として用いた『大観本草』および『政和本草』は『経史証類備急本草』の現存が確認された現在では比較対象として最善とは言えない。また改行や紙の使い方などにまでは注意をはらっておら

ず、書写年代の推定などにおける重大な手がかりをみすごしている。なお他二書は大変問題がおおい。

また、『新修本草』の復原本として完成度が高いとされるものは以下の二冊である。

岡西為人『重輯新修本草』（学術図書刊行会、一九七三）。

尚志鈞『新修本草（輯復本第二版）』（安徽科学出版社、二〇〇四）。

これらは、『新修本草』の復原を念頭に、敦煌本をその資料の一つとしてもちいている。とくに岡西の「重輯新修本草札記」は注目すべき仕事である。しかし、まず『新修本草』復原の前提として、敦煌本の正確な釈文、校釈がおこなわれる必要があるのではないか。また、敦煌における新修本草の意義やありかたを解き明かすためにも、「資料としての」性格をみきわめる必要がある。それには改行箇所やあきらかな誤写、料紙の使い方などにも注目すべきである。

最後に主要な参考文献についてふれておく。

敦煌本『新修本草』に関する要を得た解題は小曾戸洋「敦煌文書および西域出土文書中の医薬文献」（同氏『中国医学古典と日本』塙書房、一九九六）である。また、P三七一四がどのような環境で書写されたかは拙稿「文字と紙背から見た敦煌における『新修本草』——コンピュータによる用字整理を通して」（『唐代史研究』九、二〇〇六）をみられたい。

さらに本稿ではS四五三四とS九四三四とが接合するものとして釈文を作成してみた。その接合については、榮新江『敦煌学十八講』（北京大学出版社、二〇〇一）二九八頁、真柳誠「大英図書館所蔵の敦煌医業文書（一）」（『漢方の臨床』四八一七、二〇〇一）をみられたい。

また、日本伝来の『新修本草』写本については、杏雨書屋（宮下三郎）「福井崇蘭館旧蔵古鈔本 新修本草獸禽部卷第十五複製本の解説」（『杏雨』四、二〇〇一）がわかりやすい。なお本稿では敦煌本の卷一七と卷一九との対比に『仁和寺本新修本草残卷』（本草図書刊行会、一九三六）を参照した（仁本とよぶ）。また卷一八は、小島宝素謄録本を清末に入手

した傳雲龍が刊行した纂喜盧叢書影印『新修本草』（上海衛生出版社、一九五七）を用いた（傳本とよぶ）。

なお、筆者は異体字の用法に注意をはらってみようと考えていたため、極力、写本に近い用字を取った。そのため、正字と新字が混淆して書写されてみえる部分もある。ただ、印刷の都合上、この点で、完璧は期していない。

## 凡例

- ・ 写本がもちいている字に近い字形を選んでもちいた。ただし、敦煌本で頻繁に用いられる次のような異体字は現在通用している文字（括弧内）を用いることで統一した。
  - 葉（葉）、所（所）、升（升）、舛（能）、吊（則）、烟（烟）、咽（咽）、逆（逆）、霧（處）、夕（亦）、盃（蠱）、虫（虫）、本（本）
- ・ また華（花）、淡（痰）、涼（良）、耶（邪）、欬（咳）など、本写本で頻繁に通用字として用いられているとみられる文字についてはいちいちテキストによる異同は示さず、写本通りに（ ）外の文字を用いた。
- ・ 朱字はゴシックをもちいて表現した。
- ・ 原則として宋版『經史証類備急本草』（東洋医学善本叢書三〇―三四、オリエント出版社、一九九二）を用いて文字の異同を記した。そのほか『仁和寺本新修本草残卷』（本草図書刊行会、一九三六）との対比を示す際には「仁本」とし、『新修本草』（上海衛生出版社、一九五七）の場合は「傳本」と略称をあげた。
- ・ 「〔 〕」内の字は敦煌本になく、他書にある文字を示す。↓は異同があることを示すもので、いずれかが正しいことを示したのではない。とくに書名や略称が示されていない場合、『經史証類備急本草』との対比である。
- ・ 特に長尺であるP三七―一四については点線で料紙に継ぎ目がある箇所をしめし、①②③で、帖数を記した。

《校注》

P.3714 〓敦煌本「新修本草」卷一〇（部分）〓

三四對者、皆一莖直上、葉既相乱、唯以根有心、無心為別耳。

002 甘遂 味苦、\*寒、大寒有毒、主大腹疝瘕腹滿

003 面目浮腫、\*飲宿食、破癥堅積聚、利水穀道。

004 下五水、散膀胱留熱、皮中痞、熱氣腫滿。\*一名

005 主田、一名甘藁、一名陵藁、一名陵澤、一名重

006 澤。生中山川谷。二月採根、陰乾。 苳藁為之使。 惡遠志、反甘草。

007 中山在代郡、先第一本出太山、江東\*比來用京口者、大不相同。赤皮者勝、白皮\*\*都下亦有、名草甘遂、殊惡。蓋謂贗偽草耳、

008 非言草名之草。 謹案、所謂草、甘\*乃蚤休、療躄全別。真甘遂苗似澤菜、草甘遂苗一莖、\*\*端六七葉、如草麻、鬼臼葉

009 等。主食一升亦不能利。大療癰疽蛇毒。且真甘遂皆以皮赤肉白、作連珠實重者良。亦無皮白者、皮白者乃是蚤休、俗名重葶。

010 葶藶 味辛、\*苦、寒、大寒、無毒。主癥瘕、積聚、結氣

011 飲食寒熱、破堅逐耶、通利水道。下膀胱水、\*腹

012 留熱氣、皮閒耶水上出面目、\*腫身、暴中風熱、癩

013 痒。利小腹。久服令人虛。一名大室、一名大適、

①

002 \*〔甘〕、寒。

003 \*〔留〕飲宿食。

004 \* 一名主田は、一名重澤の後ろにあり。

007 \* 江東北來→江東比來。 \*\* 白皮〔者〕。

008 \* 甘〔遂者〕。 \*\* 〔莖〕端。

010 \* 苦は、朱字（神農本草部分、本稿ではゴシック）としない。

011 \* 腹は伏。

012 \* 〔浮〕腫身。

- 014 一名丁歷、一名草\*、生藁城平澤及田野。立
- 015 夏後採實陰乾 \*得酒良、榆皮爲之使。惡蠶蠶石\*\*肉。出彰  
城者最勝。今近道亦有。母則公齊。
- 016 子細黃、至苦、  
用之當熟也。
- 017 芫華 味辛、苦、温、微温、有小毒。主欬逆上氣、喉  
鳴、咽腫、短氣、蛊毒、鬼瘡、疔瘻、癰腫、蝨虫魚。  
消胃中淡水、喜唾、水腫、五水在五藏、皮膚、及  
腰痛。下寒毒、肉毒。久服令人虛。一名去水、  
020 一名毒魚、一名杜芫。根名蜀葉根、療疥、\*欬  
021 可用毒魚。生淮原川谷。三月三日採華、陰乾。  
022 決明爲之使。反甘草。近道處、  
023 有、用之微熬、不可近\*眼也。  
024 澤菜 味苦、辛、微寒、\*無毒。主皮膚熱、大腹水氣、  
025 四支面目浮腫、丈夫陰氣不足。利大小腸、明目、輕  
026 身、一名菜莖、大戟苗也。生太山川澤。三月三日、  
027 七月七日採\*、陰乾 小豆爲之使。惡薯蕷。是大戟苗、生時摘  
葉有白汁、故名澤菜。亦能噉人肉之。

②

- 014 \* 草〔藁〕。
- 015 \* 得酒良は大字（名医別録部分、本稿では明朝9p）とする。 \*\* 石〔龍〕芮
- 021 \* 欬→瘡。
- 023 \* 眼→明、也はなし。
- 024 \* 無は大字（名医別録部分）とする。
- 027 \* 採〔莖葉〕。

- 028 大戟 味苦、甘、寒、大寒、有小毒。主蠱毒、十
- 029 二水、腹滿急痛、積聚、中風、皮膚疼痛、
- 030 吐逆、頸腋癰腫、頭痛、發汗、利大小腸、一名
- 031 叩鉅。生常山。\*二月採根陰乾。  
反甘草。近道處  
有、至猥賤也。
- 032 蕘華 味苦、辛、寒、微寒、有毒。主傷寒、溫瘧
- 033 十二水、破積聚、大堅、癥瘕。蕘蕘腸胃中
- 034 留癖、飲食寒熱耶氣、利水道。\*淡飲欬嗽
- 035 生咸陽川谷及河南中牟、六月採華、陰乾。
- 036 中\*時惟從河上來、形似蕘華而極細、白色。比來隔絕、殆  
不可得。謹案、此藥苗\*\*似梭、莖無刺、花細、黃白色。
- 037 四月、五月收。与蕘花  
全不相似之也。
- 038 旋復華 味鹹、甘、溫、微溫、冷利、有小毒。主結氣
- 039 脇下滿、\*悸除水去葳間寒熱補中下氣
- 040 消胃上淡結、唾如膠朶、心脇淡水、膀胱留飲
- 041 風氣濕痺、皮間死肉、目中眇曠、利大腸、通
- 042 血脉、益色澤。一名金沸草、一名盛椹、一名

③

- 031 \*〔十〕二月。 \*\*〔皆〕有。
- 034 \*〔療〕痰飲。
- 036 \*中〔牟者、平〕時。 \*\*似〔胡〕荜。
- 039 \*〔驚〕悸。



- 054 053 052 051 050 049 048 047 046 045 044 043
- 戴樞。根主風\*温。生平澤、川澤。五月採花。
- 日乾、廿日成。出\*近道下、似菊花而大。又別有\*\*旋復相、  
\*\*\*乃出河南來、北國亦有。形似芎藭、唯
- 合旋復\*藥用之、餘無\*\*正所入也。非此旋\*\*\*伏根也。謹案  
旋\*\*\*根在中品、陶云、苗似薑、根似高涼薑而細、此是山  
薑、證\*是旋根。今復道從北國來、似  
芎藭、芎藭与高涼薑全無髣髴。
- 047 \*釣吻 味辛、温、有大毒。主金瘡、乳痃、中惡風、  
\*欬破癥積、除脚膝痺\*\*、四支拘攣、惡瘡疥  
虫、煞鳥獸。一名野葛。折之青咽出者名固
- 活。甚熱\*一宿、不入湯。生傳高山谷及會稽東野。  
秦鈎吻味辛、主喉痺、咽中寒、聲變、欬逆氣、温中。一名除辛、  
一名毒根。生寒名山、二月、八月採。半夏為之使。惡黃芩。五符  
中亦云、鈎吻是野葛、言其入口能鈎人喉吻、或言吻作挽字。  
牽挽人\*腹而絕之、竅事言、乃事兩物。\*\*葛是根、狀如牡丹、  
所生處亦有毒、飛鳥不得集之。今人用合膏服之无嫌。  
鈎吻別是一草、葉似黃精而莖\*而莖紫、\*\*儻心抽花、黃  
色。初生既極類黃精、故以為煞生之對也。或云鈎吻是  
毛萇、\*此本經及後說皆參錯不同、未詳定云何。又有一

④

- 043 \* 温→濕。
- 044 \* 近道下〔濕地〕。 \*\* 旋復相→旋覆根。 \*\*\* 乃はなし。
- 045 \* 藥→膏。 \*\* 正はなし。 \*\*\* 旋伏根→旋覆根。 \*\*\*\* 旋〔覆〕根
- 046 \* 證〔不〕
- 047 \* 釣→鈎
- 048 \* 欬〔逆上氣、水腫、殺鬼疰蠱毒〕破。 \*\* 痺〔痛〕
- 050 \* 一宿なし。
- 052 \* 腹→腸。 \*\* 〔野〕葛。
- 053 \* 而莖なし。 \*\* 儻→當。
- 054 \* 此本經及後說→此本經乃後說。

- 066 名山葱。生太山谷。二月採根、陰乾。  
黃連爲之使。  
反細辛、\*勺藥、
- 065 馬刀、爛瘡、不入湯。一名葱苒、一名葱菝、一
- 064 去死肌。療\*碗逆、喉痺不通、鼻中息肉、
- 063 洩利、腸癖、頭瘍、疥癢、惡瘡。斂諸虫毒
- 062 藜蘆 味辛、苦、寒、微寒、有毒。主蠱毒、欬逆
- 061 石龍芮何干鈎吻、\*秦中遍訪元無物、陶乃文外浪說耳。
- 060 云、鈎吻葉似鳧葵、並非黃精之類。毛萹是有毛、  
柴兩葉或四五葉相對。鈎吻蔓生葉如\*\*柳葉。博物志
- 059 起者\*固活、爲良。此亦\*\*不之言也。且黃精直生、如龍膽、澤  
經年已後則有塵起、根骨似枸杞、有\*細孔久者、折之則  
塵氣從孔中出、今折枸杞根亦然、經言折之青烟
- 058 根似地骨、嫩根如漢中防已。皮節斷者良、正与白花藤  
根相類、不深別者、頗亦\*或之。其新取者、折之無塵氣。
- 057 羊食苗大\*物肥、有相伏如此。若巴豆鼠食則肥也。陶云、  
飛鳥不得集之、妄矣。其野葛以時新採者、皮白骨黃、宿
- 056 有、彼人通名鈎吻。亦謂苗名鈎吻、根名野葛。蔓生。\*人  
自求死者耶一二葉手揉使汁出、掬水飲、半日即死。而
- 055 物名陰命、赤色、著木懸其子、生山海中、最有大毒、\*入  
口即煞人耶。謹案、野葛\*\*桂州已南、村墟閭巷間皆

⑤

- 055 \* 入口即→入口能立。 \*\* 野葛〔生〕桂州。
- 056 \* 「人自~即死」→人或誤食其葉皆致死。
- 057 \* 物肥→肥物
- 058 \* 或→惑
- 059 \* 有細孔久者折之→有細孔者久折之。
- 060 \* 起者〔名〕。 \*\* 不〔達〕。 \*\*\* 柳→柿。
- 061 \* 「秦中遍訪元無物、陶乃文外浪說耳」なし。
- 064 \* 碗→噉
- 066 \* 勺→芍

- 067 五參、惡大黃。近道處有。\*本下極似葱而多毛、用之止剔取根、微灸之。
- 068 赭魁 味甘、平、無毒。主心腹積聚、除三虫、生山
- 069 谷。二月採 狀如小芋子、肉白、皮黃。出近道亦有。謹案、赭魁大者如斗、小者猶如升。葉似杜蘅。莠生草木上、有小毒、陶所說者乃土卵耳。不堪藥用。梁、漢人名為黃獨、蒸食之、非赭魁也。
- 070 及巳 味苦、平、有毒。主諸惡瘡、疥癩、癩蝕及牛馬諸瘡。 今人多用以合瘡疥膏、甚驗也 謹案、此草一莖、頭四葉、陳著白花。好
- 071 生山谷陰虛軟地。根似細辛而黑。有毒、入口使人吐。而今以儻杜蘅非也\*。
- 072 烏頭 味辛、甘、温、大熱、有毒。主中惡風、洗、出汗、除寒温、欬逆上氣、破積聚寒熱、消胃
- 073 上淡冷、食不下、心腹冷疾、膺間痛、肩、脾痛、不可俛仰、目中痛、不可力視、又墮胎。
- 074 其汁煎之名射罔、煞禽獸。射罔味苦、有大毒。
- 075 療尸注、癥堅及頭風痺痛。一名奚毒、一名即子、一名烏喙 味辛、微温、有大毒。主風濕、丈夫腎濕、陰

⑥

- 067 \* 本→根
- 073 \* 末尾に「疥癩必須用之」あり。
- 074 \* 有〔大〕毒。
- 075 \* 除寒濕〔痺〕、咳逆止氣。
- 076 \* 脾→胛
- 077 \* 力→久。
- 079 \* 一名〔烏喙〕。

082 囊痒、寒熱歷節、掣引膏痛、不能行步、  
 癰腫膿結。又墮胎。生朗陵。川谷。正月、二月

081

083 採陰乾。長三寸\*以上為天雄 莽草為之使。及  
半夏、\*\*栝貝母、白欬

084 白芨\*惡藜。初有臙形烏鳥之頭、故謂。兩枚共帶狀如牛  
 角名\*\*烏罔、搗篩以傳箭、射肉中人亦死、\*\*\*復即解之。

085 謹案、\*烏縱天雄、附子有岐者、仍依本名。如烏頭兩岐、即名  
 烏喙。天雄、附子若有並兩\*\*者、復云何名之。

086 天雄 味辛、甘、温、大温、有大毒。主大風、寒濕痺、

087 \*節痛、拘攣緩急、破積聚耶氣、金瘡。強筋

088 骨、輕身健行、療頭面風去來疼痛、心腹結

089 積、關節重不能行步。\*長氣強志\*\*武勇、力作

090 不倦。又墮胎。一名白芨。生少室山谷。二月

091 採根陰乾。 遠志為之使。惡腐\*婦。今採用八月中旬。  
天雄似附子、細而長便是、長者乃至三

092 四寸許、此与烏頭、附子\*謂為三建。本並出建平、故謂為  
 三建。今宜都很山最、好謂為西建。錢塘間者、謂為東

093 建。氣力\*不相似、故曰西水、猶勝東白也。其用灰熬之時、  
 有水強巨者並不佳。 謹案、天雄、附子、烏頭等並以蜀道

⑦

082 \* 川→谷。

083 \* 以→巳。 \*\* 栝〔樓〕。

084 \* 惡藜〔蘆、今採用四月。烏頭與附子同根、春時莖初生、有〕腦形似烏鳥之頭、故謂之烏頭。  
 \*\*「烏罔、搗篩以敷箭、射肉中人亦死」→「烏喙、喙即烏之口也。亦以八月採、搗竿莖、取汁、日煎為射罔。獵人以傳箭射禽獸、中人亦死」。 \*\*\* 復即→速宜。

085 \* 烏〔喙即烏頭異名也。此物同苗、或有三岐者、然兩岐者少〕縱天雄。  
 \*\* 兩〔岐〕者。

087 \* 〔歷〕節痛。

089 \* 〔除骨間痛〕長〔陰〕氣。 \*\* 〔令人〕武勇。

091 \* 婦→婢。

092 \* 謂為三建→三種。

093 \* 氣力〔劣弱〕、不相似

- 094 綿州、龍州出者佳。餘處從有造得者、氣力劣弱、都不相似。江南來令全不堪用。陶以三物、俱出建平故名之、非也。
- 095 案國語、實葶子肉。注云、烏頭也。尔雅云、芑、葶草。郭注云、烏頭苗。此物本出蜀漢、其本名葶、今說為建、遂以建平釋之。又石龍芮葉似葶。故名水葶今復說為水葶亦作建音、此豈復生建平耶。檢字書又無葶。
- 096
- 097 字。甄立言本草音\*、亦論之。天雄、附子、側子並同用。八月採造、其烏頭四月上旬、今云二月採、恐非時也。
- 098 附子 味辛、甘、温、大熱、有大毒。主風寒欬逆耶氣、温中、金瘡。破癥堅積聚、血癥、寒濕蹇躄、拘攣膝痛、不能行走、脚疼冷弱、腰脊風寒、心腹冷痛、霍乱轉筋、下利赤白。堅肌骨、強陰。又墮胎、為百藥長。生犍為山谷及廣漢。八月採為附子、春採為烏頭。
- 100 躄、拘攣膝痛、不能行走、脚疼冷弱、腰脊
- 101 風寒、心腹冷痛、霍乱轉筋、下利赤白。堅肌骨、
- 102 強陰。又墮胎、為百藥長。生犍為山谷及廣
- 103 漢。八月採為附子、春採為烏頭。 地膽為之使、惡 吳公。畏防風、黑
- 104 豆、甘草、黃耆、人參、烏韭、 \* 八角者為良。凡用三建、 附子、以八月上旬採也。
- 105 皆熱灰炮令拆、勿過焦。酒薑附湯生用之。
- 106 俗方動用附子、皆須甘草或人參、生乾薑

⑧

097 \* 音〔義〕。

104 \* 「八角～故也」(104～107行)は陶注。敦煌本では大字になっているが、内容からみて双行注(小字)の体例とすべきである。

- 107 相配者、正以制其毒故也。
- 108 側子 味辛、大熱、有大毒。主癰腫、風痺歷節
- 109 腰脚疼冷、寒熱鼠癩。又墮胎。此即附子
- 110 邊角之大者、脫取之。昔時不用、此來醫\*
- 111 以療脚\*多驗。凡此三建、俗中乃是同根、而
- 112 本經分生三處、當各有所宜故也。方云少
- 113 室天雄、朗陵烏頭、皆稱本土、今則無別矣。
- 114 少室山連嵩\*、朗陵縣屬豫州汝南郡、今在
- 115 北國。謹案、側子只是烏頭下共附子、天
- 116 雄同生小者。\*側之与附、皆非正
- 出也。以小者為側
- 117 \*大者為附、今稱附子角為側、理必不然、若當陽\*\*八十、江左及山
- 南嵩高、齊、魯間、附子時復有角如大豆許。夔州已上劍南所
- 118 出者、附子之角、曾微黍粟、持此為用。誠亦難充。比來京
- 下、皆用細附子有効、未當取角、若然、方須八角附子、應
- 119 言八角子、附子也。言取
- 角用、不近人情\*。
- 120 羊躑躅 味辛、温、有大毒。主賊風在皮膚中淫痛、

⑨

- 109 \* 「此即~北國」(109~115行)までは陶注。「謹案~非正」(115~116行)までは『新修本草』の注。敦煌本ではいずれも大字になっているが、内容からみて双行注の体例(小字)とすべきで、敦煌本の書写ミスとみられる。
- 110 \* 醫〔家〕。
- 111 \* 脚〔氣〕。
- 114 \* 嵩〔高〕
- 116 \* 側之与附→側子与附子。
- \*\* 生は「皆非正」につらなって一句をなす。(109\*)参照。
- 117 \* 大者為附、今稱附子角為側→〔子〕大者為附〔子〕、今稱附子角為側〔子〕。
- \*\* 八十→己下。
- 119 \* 人情〔也〕。

- 121 温虐、惡毒、諸痺、耶氣。鬼注蠱毒。一名玉支、生太行山谷及淮南山、三月採華、陰乾。
- 122 今道、近諸山皆有、華黃似鹿葱、羊誤食其葉、躑躅而死、故以為名、亦不可近眼。謹案、玉支、躑躅一名、陶
- 123 於支子注中云、是躑躅、子名玉支、非也。
- 124 花亦不似鹿葱、正似\*嵩旋、花黃色也。
- 125 茵芋 味苦、温、微温、有毒。主五藏耶氣、心腹寒熱、羸瘦、如瘰狀發作有時、諸關節風濕痺痛。久風、脚弱、一名莞草、一名卑共。生太行山谷、三月三日採葉、陰乾。
- 126 好者出彭城、今近道亦有、莖
- 127 葉狀如莽草而細軟耳。用之皆連細莖。方用甚稀、唯以合療風酒、散用之。
- 128 射干 味苦、平、微温、有毒。主欬逆上氣、喉痺咽痛、不得消息、散結氣、腹中耶逆、食飲大熱。\*老血在心\*\*肝脾閒、欬唾、言語氣臭、散胃中熱氣。久服令人虛。一名烏扇、一名烏蒲、一名烏鬢、一名烏吹、一名草薑。生南陽川谷、

⑩

124 \* 嵩旋→旋菴。

127 \* 〔濕走四肢〕脚弱。

132 \* 〔療〕老血。 \*\* 肝なし。

- 146 毒、煞三虫。去寸白、破癥瘕、除頭風、止金瘡。
- 145 貫衆 味苦、微寒、有毒。主腹中耶熱氣諸
- 144 有白、今陶云由跋、  
正說鳶尾根莖也。
- 143 碧色、\*相似高涼薑、皮黃肉白、有小毒、嚼之戟人咽\*\*、与夜  
干全別。人家亦種、所在有之。夜干花紅、抽莖長、根黃
- 142 一種物。方亦有用、鳶頭者即應是其根。療體相似、而本草  
不顯之。 謹案、此草葉似夜干而闊短、不抽長莖、花紫
- 141 園。生九疑山谷、五月採。 方家皆云、是夜干苗、無鳶  
尾之名、主療亦異、此當別一
- 140 瘰癧聚大水、下三虫。療頭眩、煞鬼魅。一名烏
- 139 鳶尾 味苦、平、有毒。主蠱\*耶、鬼注諸毒、破癥
- 138 其鳶尾、葉都似夜干、而花紫碧色、不抽高莖、根似高涼  
薑而肉白、根即鳶頭也。陶說由\*跃、都論此耳也。
- 137 有射干、相似而花白、莖長、似射人之\*熱竿者。故阮公詩云、  
射干臨增城。此不入藥用、根亦無塊\*\*。謹案、射干、此說者是
- 136 毒腫。方多作\*干字、今將亦作夜音、乃言其葉是鳶尾、而  
復有鳶頭、此蓋相似耳、恐非。烏鬻、即其葉名矣。又別
- 135 生田野。三月三日採根、陰乾。 此即是烏鬻根、庭壇  
多種之、黃色、亦療

⑪

- 136 \* [夜] 干
- 137 \* 熱→執。 \*\* 無塊 [惟有其質]。
- 138 \* 跃→跋
- 139 \* 蠱 [毒]
- 143 \* 相→根 \*\* 咽 [喉]。



- 147 花、療惡瘡、令人洩。一名貫節、一名貫渠、一名百頭、一名虎卷、一名扁符、一名伯萍、一名藥藻。此謂草鷄頭。生玄山、谷及宛胸。
- 149 又少室\*、二月、八月採根、陰乾。  
藟菌為之使、近道亦有、葉如大
- 150 蕨、其根形色\*芒全似老鷄頭、故呼為草鷄頭也。
- 151 半夏 味辛、平、生微寒、熟温、有毒。主傷寒熱、心下堅、\*氣喉咽腫痛、頭眩、胃脹、欬逆、膈鳴、止汗。消心腹胷中\*鬲淡熱滿結、欬嗽上氣、心下急痛堅痞、時氣嘔逆、消癰腫、胎墮、療萎黃、悅澤面目。生令人吐、熟令人下。用之湯洗、令滑盡。一名地文、一名水玉、一名守田、一名示姑。生槐里川谷。五月。八月採根、曝乾。  
射干為之使、惡皂莢、畏雄黃、生\*乾薑、秦皮、龜甲、反烏頭。槐里屬扶風、今第一出青戈。
- 152 吳中亦有、以肉白者為佳、不厭陳久。用之皆\*湯洗十許過、令滑盡、不尔戟人咽\*\*。方中有半夏、必湏生薑者、
- 153 154 155 156 157 158 159 160

150 \* 少室 [山]。  
 153 \* [下] 氣。  
 154 \* 鬲淡→膈痰。  
 159 \* 生 [薑]  
 160 \* 皆 [先]。 \*\* 咽 [喉]。

- 172 半夏、即由來以由跋為半夏也。釋由跋苗全說鳶尾、南人至今猶用由跋為半夏。
- 171 扁柿。四畔有圓牙、\*如看虎掌、故有此名。其由跋是新根、猶大於半夏二三倍、但四畔無子牙耳。陶云、虎掌似
- 170 一莖、掩頭一葉、枝丫狀莖。根大者如拳、小者如\*若卵。都似
- 169 採、陰乾。蜀柴為之使、惡莽草。近道亦有、極似半夏、但皆大、四邊有子如虎掌、今用多破之、或三、
- 168 陰下濕、風眩、生漢中山谷及宛胸。二月、八月
- 167 \*虎掌 味苦、温、微寒、有大毒。主心痛寒熱\*\*
- 166 尔乖越、非唯不識半夏、亦不知由跋与鳶尾耳\*。
- 165 子。苦酒磨塗腫亦效、不入餘藥。謹案、由跋根、尋陶所注、乃是鳶尾根、即鳶頭也。由跋今南人以為半夏、頓
- 164 由跋\*根、主毒腫結熱。本出始興、今都下亦種之。狀如烏髮而布地、花紫色、根似附
- 163 事混淆、陶\*竟不識。
- 162 頃來互相用、功狀殊異。問南人、說苗乃是由跋。陶注、虎掌極似半夏。注由跋乃說鳶尾、於此注中似說由跋。三
- 161 亦以制其毒故\*。謹案、半夏所在皆有、生澤中者、\*\*羊眼半夏、圓白為勝。然江南者、大乃徑寸、南人特重之。

⑫

- 161 \* 故〔也〕。 \*\*〔名〕羊眼。
- 163 \* 竟→終。
- 164 \* 根なし。
- 166 \* 耳〔也〕。
- 167 \* 虎は朱字（神農本草部分）。  
\*\* 熱〔結氣、積聚伏梁、傷筋痠拘緩、利水道。除〕陰。
- 170 \* 若→鷄。
- 171 \* 如看→看如。

- 173 萹唐子 味苦、甘、寒、有毒。主齒痛出虫、肉痺拘急、使人健行見鬼。療癩狂風痼、顛倒拘攣。多食令人狂乏。久服輕身。
- 174 萹唐子 味苦、甘、寒、有毒。主齒痛出虫、肉痺拘急、使人健行見鬼。療癩狂風痼、顛倒拘攣。多食令人狂乏。久服輕身。
- 175 萹唐子 味苦、甘、寒、有毒。主齒痛出虫、肉痺拘急、使人健行見鬼。療癩狂風痼、顛倒拘攣。多食令人狂乏。久服輕身。
- 176 走及奔馬。強志、益力、通神。一名行唐、一名橫唐。生海濱川谷、\*生雍州、五月採子。今處、亦有。子形頗似五味核而\*小、唯入療癩狂方用、尋此乃不可多食過劑耳。久服自無嫌、通神健行、足為大益、而仙經不見用之。狼唐、今方家多稱 萹也。
- 177 一名橫唐。生海濱川谷、\*生雍州、五月採子。
- 178 今處、亦有。子形頗似五味核而\*小、唯入療癩狂方用、尋此乃不可多食過劑耳。久服自無嫌、通神健行、足為大益、而仙經不見用之。狼唐、今方家多稱 萹也。
- 179 足為大益、而仙經不見用之。狼唐、今方家多稱 萹也。
- 180 蜀柒 \*葉味辛、平、微温、有毒。主瘡及欬逆
- 181 寒熱、腹中癥堅、痞結、積聚耶氣、蠱毒鬼注。\*胷中耶結氣吐出之。生江林山
- 182 川谷生蜀漢中、恒山苗也。五月採葉、陰乾。
- 183 栝樓為之使、惡貫衆。猶是恒山苗、而所出又異者、江林山即益州江陽山名、故\*是同處耳。彼人採、仍築結丸、得時燥者、佳矣。謹案、此草曰干、微萎則把、曝使燥、色青白堪用、若陰乾便黑爛鬱壞矣。陶云作丸、此椹餅、非蜀柒。
- 184 栝樓為之使、惡貫衆。猶是恒山苗、而所出又異者、江林山即益州江陽山名、故\*是同處耳。彼人採、仍築結丸、得時燥者、佳矣。謹案、此草曰干、微萎則把、曝使燥、色青白堪用、若陰乾便黑爛鬱壞矣。陶云作丸、此椹餅、非蜀柒。
- 185 若陰乾便黑爛鬱壞矣。陶云作丸、此椹餅、非蜀柒。
- 恒山 味苦、辛、寒、微寒、有毒。主傷寒、熱、發

⑬

- 177 \* 生→及。
- 178 \* 〔極〕小。
- 180 \* 葉なし。
- 182 \* 〔療〕胸中。
- 184 \* 〔是〕同處
- 185 \* 把〔束〕

- 187 温瘧、鬼毒、胃中淡結吐逆、鬼蠱往來、
- 188 水脹、洒、惡寒、鼠癭。一名互草。生益
- 189 \* 川谷及漢中。八月採根、\*\*陰乾。  
畏王扎。出宜都、建平。細實
- 190 \* 呼爲鷄骨恒山、用最勝。謹案、今恒山葉似茗  
\*\* 兩葉相當。三月生白花、青萼。五月結實
- 191 \* 房。生山谷間、  
\*\* 不過\*\*四尺。
- 192 \* 味苦、微寒、無毒。主耶氣、皮膚熱、風
- 193 瘡身痒、殺三虫。惡瘡、疥虱、痔蝕、下部蠹瘡。
- 194 \* 其子名草決明、療脣口青。一名草蒿、一名
- 195 萋蒿。生平谷道傍。三月採莖、陰乾。
- 196 五月六月採子。  
處、有。似麥柵華、其子甚細。後  
又有草蒿、別本亦作草\*。今主
- 197 療殊相類、形名又相似、極足為疑、而實兩種。謹案、  
此草、苗高尺許、葉細軟、花紫白色、實作角、子黑扁
- 198 \* 實而大。生下濕地、四月五月採。荆襄人名為  
\*\* 搗汁單服、大療温癘也。
- 199 牙子 味苦、\* 寒。主耶氣熱、疥瘡惡瘡

(14)

189 \* [州] \*\* [陰] 乾

190 \* [黃者]。 \*\* [狹長、莖圓]。

191 \* [青圓、三子爲]。 \*\* [高者]。 \*\*\* [三]。

192 \* [青箱子]。

194 \* 其なし。

195 \* 莖 [葉]。

196 \* 草 [藁]。

198 \* [光、似菟]。 \*\* [崑崙草]。

199 \* [酸]、寒、[有毒]。

200 痔、去白虫。一名狼牙、一名狼齒、一名狼子、

201 \*   大牙。生淮方川谷及冤胸。八月採根、

202 \*   濕腐生衣者、煞人。  
蕪荑為之使、  
惡地榆、棗肌。

203 \*     有、其根  
\*\*   似  之牙齒。

204 白斂 味苦、甘\*、微寒、無毒。主癰腫疽瘡、散

205 結氣、止痛、除熱、目中\*亦、小兒驚癇、温

206 瘧、女子\*除中腫痛、下赤白、斂大毒。一名

P.3822  
△敦煌本『新修本草』卷一八（拔粹）▽

001 葱實 味辛、温、無毒。主\*療明目。補中不足。其莖葱白、平。\*\*中作湯、\*\*\*主傷主傷寒寒、熱出

002 汗、中風、面目腫。傷寒骨肉痛。\*惟痺不通。安胎。歸目。除肝耶氣、安中利五藏、益目\*\*精。煞百

003 藥毒。葱根、主傷寒頭痛。葱\*計平、主溺血、解藜蘆毒。\*\*謹案、葱有數動、山葱曰荅\*\*\*、療病

004 似胡葱。主諸惡載、狐尿刺毒、山溪中沙虱、射工等毒。煮\*汗浸、或鴛\*\*薄怙。大效。亦兼山蒜菜、更

005 葉輩、不獨用也。其人間食葱、又有二種、有\*凍葱經冬不死、分莖栽蒔而\*\*無無子也。又有漢葱、

006 冬即葱枯\*。食用入藥、凍葱最善、氣味亦佳。

---

201 \* [一名]。  
202 \* [暴乾。中]。  
203 \* [近道處處]。  
\*\* [牙亦] 似 [獸]。  
204 \* 甘、[平]。  
205 \* 亦→赤。  
206 \* 除→陰。

(背面)

007 苦瓠 味苦、寒。有毒。主大水、面目四\*枝浮腫、下水、令人吐\*\*。  
○水蘘、味辛、\*\*\*温。無毒。主下氣、煞\*\*\*一穀、

008 除飲食、○辟口臭。\*玄毒、辟惡氣。久\*\*腹通神明、輕身\*\*\*能老、主吐血衄血、崩。一名雞蘘\*\*\*。

009 \*紫蘇、味辛、温。主下氣、除寒中、\*\*子尤良。葉下紫色、而氣\*\*\*其香、其無紫\*\*\*不香。似荏者、名野蔴、不任\*\*\*

010 用。其子\*至下氣、与橘皮相宜同療。蓼實、味辛、温。無毒。主明目、温中、耐風寒、下水氣、面目

011 浮腫、癰瘍\*。○荏子、味辛、温、無\*\*。主欬逆下氣、温中補體。葉主調中、去臭氣。九月採、

012 陰乾。○苜蓿、味苦\*、無毒。主安中、利人、可久食。芥、味辛、温。無毒、歸鼻、主除腎耶氣、

013 利九竅、明耳目、安中、久食温中。

◎P.3822

- 001 \* 療なし。傳本は療あり。  
\*\* 中作湯→可作湯。傳本は中作沍湯。  
\*\*\* 主傷主傷寒寒→主傷寒寒。傳本も主傷寒寒。
- 002 \* 惟痺→喉痺。傳本も喉痺。  
\*\* 精→晴。傳本は精。
- 003 \* 葱計→葱汁。傳本も葱汁。  
\*\* ここから006行の「氣味亦佳」までが『新修本草』の注。\*\*\* 荅→荅〔葱〕。
- 004 \* 汗→汁。  
\*\* 鳩薄帖→鳩傳大。傳本は鳩薄帖。
- 005 \* 傳本は凍葱を陳葱とする。  
\*\* 無なし。傳本もなし。
- 006 \* 冬即葱枯→冬即葉枯。
- 007 \* 四枝→四肢。 \*\* 吐〔生管地川澤〕。  
\*\*\* 〔微〕温。 \*\*\*\* 一なし。
- 008 \* 玄→去。 \*\* 腹→服。 \*\*\* 能→耐。  
\*\*\*\* 一名勞祖、一名芥菴、一名芥菹、生九真池澤七月採。
- 009 \* 紫なし。 \*\* 〔其〕子。 \*\*\* 其→甚。  
\*\*\*\* 紫〔色〕 \*\*\*\*\* 任→堪。
- 010 \* 至→主。
- 011 \* 癰瘍。〔葉歸舌、除大小腸邪氣、利中益志馬蓼、去腸中蛭虫、輕身。生雷澤川澤〕。  
\*\* 無〔毒〕。
- 012 \* 苦、〔平〕。

〆敦煌本『新修本草』卷一七(部分)〱

001 筋骨断碎疼痛、腫、癩\*有效。其皮名扶。搗為散、蜜和塗

002 療丹\*火、療毒腫、實\*\*銅孩兒、令齒不生。樹白皮 水煮汁、主溪毒也。

003 櫻桃、味甘。主調中、益脾氣、令人好\*色美志。  
\*\*此即今朱  
酸可食、而

004 与前櫻桃相似、恐醫\*載之。未必是今者耳。又胡頹子\*\*陵冬不彫、子\*\*\*  
益人。或云寒熱病不可食。謹\*\*葉搗、傅蛇毒、絞葉、汁服、防蛇毒\*\*\*攻内也。

005 梅實、味酸、平。無毒。主\*療下\*\*氣、  
除熱煩滿、安心、肢體痛、

006 偏枯不仁、死肌。去青黑誌、惡疾。止下\*利、好睡口乾。生漢

007 中川谷、五月採、火乾。此亦\*于是、  
漬飲汁。生烏梅也。用\*\*去核、\*\*\*熱之、傷寒煩熱、水  
梅子及白梅亦應相似、\*\*\*\*人今多用白梅

008 和、以\*點食惡肉也。服黃精人、云禁食梅實。別録云、梅根療

風痺。出土者\*\*熱煞。\*\*\*今梅實利筋脉、去痺。

009 \*  
□□□□□  
平、無毒、主卒嘔、不止下氣  
\*\*不暇煮者、但嚼食、亦差人、以作飲\*\*\*乃冷。  
謹案、用\*\*\*枇杷葉、煩灸而拭去毛。

校注は124ページ。

△敦煌本『新修本草』卷一八〜一九（部分）▽

令入氣喘。\*□□  
食戟不

\*□□□□□□□□也。今小兒食之、便覺脚痛。謹案、此物業似\*\*麵、  
肥地亦蔓毚生、莖\*\*\*赤色、多生濕地、\*\*\*生谷陰處、山南江

003 左人、好生食\*之。関中  
謂之、涪菜\*\*也。

004 葫、味辛、温。有毒。主散癰腫蠱瘡、除風耶。煞毒

005 氣。獨子者亦佳。\*辛歸五藏。久食傷人、卯目明、五月\*\*採之。

006 今人謂葫為大蒜、謂蒜為小蒜、\*其氣類相似也。性最薰臭、不可食。  
俗人作齏以噉鱸。\*\*卯性伐命、莫此之甚。此物唯\*\*\*不炙。以合青魚鮓

007 食、令人發黃。取其條上子、初種之成獨子葫、明年則復本。謹案、此  
物炙為羹臠、極俊炙、薰氣亦微。下氣消穀、除風破\*陰、足為饌中

008 之後、而注云中不中炙、\*用。  
當是未經試\*\*用也

009 蒜 味辛、温、\*無毒。歸脾腎。主霍乱、腹中不安、消穀理

010 胃、温中、除耶痺毒\*、五月五日採之。

小蒜生葉時、可炙利食、  
至五月葉枯、

取\*\*

011 子、正爾噉之、亦甚薰臭。\*性辛熱、中冷、霍亂、煮飲之。主深毒\*\*。  
可長。謹案、此蒜与胡葱相得、主惡載毒、山溪中沙虱、水毒大效。山人俚

001 \*〔俗傳言〕。傳本も同じ。  
 002 \*〔利人脚恐由閉氣故〕。傳本も同じ。 \*\* 似麵→似蕎麥。傳本は「似麵麥」。  
 \*\*\* 莖〔紫〕。傳本も同じ。 \*\*\*\* 生→山。傳本も同じ。  
 003 \* 傳本、之なし。 \*\* 也なし。  
 005 \* 辛なし。 \*\* 五月〔五日〕。傳本も同じ。  
 006 \* 〔以〕其氣。 \*\* 〔肉〕損。 \*\*\* 不〔生食、不中〕炙。傳本は「生不中炙用」。  
 007 \* 陰→冷。傳本も同じ。  
 008 \* 用→自。 \*\* 用也→爾。傳本は「耳」。  
 009 \* 無毒→有小毒。  
 010 \* 毒〔氣〕。 \*\* 取〔根名亂〕  
 011 \* 性辛→辛性。 \*\* 毒〔食之損人、不〕。



- 012 獠時用之也。
- 013 薑汁 味甘、寒、無毒、主馬毒瘡、汁洗之并服之
- 014 薑菜也、出小品方。万畢方云、除蝨蠍毒及腫。 此  
采
- 015 謂之野生、非人所種。俗謂之薑菜、葉似藪、花紫色者。新附。
- 016 芸薹 味辛溫。無毒。主風游丹腫、乳癰。 別錄云、春食之能發膝  
\*病、人間所噉\*\*菜也。新附。
- 017 新修本草米部卷第十九\*
- 018 上 胡麻 青蘘 麻蕒 麻子 枱糖
- 019 中 大豆 赤小豆 豉 大麦 穞麥 小麥 青梁米
- 020 黃梁米 白梁米 粟米 丹\*米 米\*\*薜子 秫米 陳\*\*\*粟米 酒
- 021 下 腐婢 菹豆 黍米 粳米 稻米 稷米
- 022 酢 醬 塩 等\*\*\*\*
- 023 右米部等部廿八種 六種神農本草經、廿  
二種名醫別錄
- 024 \*上 胡麻、味甘、平、無毒。主傷中、虛羸、補五内、益氣力、長肌
- 025 肉、慎髓草、堅筋骨、\*金瘡止痛。及傷寒溫瘧、大吐
- 026 後虛熱羸困、久服輕身不老。明耳目、耐飢延年。以

016 \* 膝病、人間→膝痲疾、此人間。 \*\* 菜→藪。  
017 \* 仁本は次行に「司空上柱国英国公李勣等奉 勅修」あり。  
020 \* 丹〔黍〕。 \*\* 薜→擊。 \*\*\* 粟→粟。  
022 \* 等なし。  
024 \* 仁本は「上」字の右に「米」字あり。  
025 \* 〔療〕金。

- 001 \* 痧〔血〕。 \*\* 塗〔肉、令急縮。毛殼〕。
- 002 \* 丹火→火丹。 \*\* 仁本、飼→餌。
- 003 \* 好〔顔〕色。  
\*\* 此即今朱〔櫻、味甘〕酸可食、而〔所主又〕
- 004 \* 醫〔家濫〕。仁本は「醫濫」。 \*\* 陵→凌。  
\*\*\* 子〔亦應〕。仁本も「子亦應」。 \*\*\*\* 謹〔案〕。  
\*\*\*\*\* 内攻。仁本も「内攻」。
- 005 \* 療なし。仁本も療なし。 \*\* ~は破断面を示す記号として  
もちいた。右上(001~008行)がS.4534/1、左下(005行~  
009行)がS.9434である。紙にゆがみがあり、破断面が補修  
整形されているため完全には接合しない。
- 006 \* 利→痢。
- 007 \* 于なし。仁本も于なし。 \*\* 用〔當〕。仁本は「用之」。  
\*\*\* 〔微〕熱。仁本も「微熱」。 \*\*\*\* 人今→今人。
- 008 \* 點〔誌、蝕〕惡。仁本は「點誌、食惡」。 \*\* 熱煞→煞人。  
仁本は「煞人」 \*\*\* 今なし。仁本も今なし。
- 009 \* 〔枇杷葉 味苦〕、平、無毒。 \*\* 〔其葉〕不暇  
\*\*\* 乃→則小  
\*\*\*\* 枇杷なし。 \*\*\*\*\* 〔火〕灸。

糞。生上薫川澤。  
 髮。 \* 一名巨豚、一名猢猻、一名方莖、一名鴻臚。葉名青

佐油、微寒。利大腸、胞衣不落。生者磨瘡腫、生禿  
 八穀之中、唯此為良。淳黑者名巨豚。巨者大也。是為  
 大豚。本生大宛、故名胡麻。又莖方名臣豚、莖

028 \* 「一名巨  
 豚」は「一  
 名鴻臚」の  
 後ろにあり。

## おわりに

本稿でとりあげたP三七一四は朱墨雑書の『新修本草』の古態を保つ現存する写本の中でも珍しい存在である（他の敦煌本『新修本草』は黒単色）。ただ、校注にしめしたように、あきらかに書き損じた部分があるばかりでなく、ところどころ雑に書写されていることがみてとれ、決して精緻な写本ということとはできない。ただ逆に書き損じがあることは、この写本がどのようにして書写されたのかを推測する手がかりにもなりうるようにおもわれる。

また日本において発見された古鈔本一〇巻は江戸の天保三―一三年の間に伝録されたとされるが、うち巻一三、一四、一八、二〇はなににもとづいたかがいまだにあきらかになっていない。岡西為人は校勘することによって、この四巻がほかの六巻とかなり感触がちがうと認識したとするが（前掲『重輯新修本草』一六三頁）、その「感触」は何なのか、敦煌本はそれを明示する有力な材料のひとつにもなろう。なお、本稿はできる限り、正確に作成するにつとめたが、疎漏はまぬがれないと考えている。おおかたのご批正を請う次第である。

本稿は平成一八年度科学研究費補助金・若手研究（B）「中国南北朝隋唐期における医事制度史の研究」の成果の一部である。

なお、本稿作成にあたって、英国図書館、フランス・ウッド女史、グラハム・ハット氏、フランス国立図書館、ナタリー・モネ女史、ヴェロニク・ペランジェ女史、茨城大学・真柳誠先生、新潟大学・關尾史郎先生、逸見龍生先生、駒形千夏先生をはじめとした方々の多大なお力添えをいただいた。ここに謝辞を記しておきたい。